

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02389

研究課題名(和文) 日本中世貨幣史の再構築 学際的な中世貨幣学の確立に向けて

研究課題名(英文) Reconstructing Japanese Medieval Numismatic History: Toward the Establishment of an Interdisciplinary Medieval Numismatics

研究代表者

中島 圭一 (NAKAJIMA, Keiichi)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：50251476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,000,000円

研究成果の概要(和文)：最終年度にCOVID-19の影響で計画の度重なる延期や変更を余儀なくされたものの、研究期間全体を通じて10回にわたり、貨幣流通関係の古文書、出土銭の実物と出土地点、あるいは銭貨流通の拠点遺跡などの現地調査と研究会を開催し、研究組織全体で相互に成果・知見や視点・方法を共有した。本研究の主要メンバーのほぼ全員と、研究会に招いたゲストスピーカーの一部から寄せられた15本の論文を、「中世貨幣の成立と展開」「貨幣をめぐる明と日本」「出土銭からみた貨幣流通」「中世から近世へ」の四部に編成して、中島圭一編『日本の中世貨幣と東アジア』(勉誠出版)として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世貨幣を研究の対象とする日本史学(文献史学)・考古学・東洋史学・経済史学などの主要な研究者が集まり、個々の専門の枠を超えて共に同じ古文書や遺跡・出土遺物を実見するとともに研究報告・討論を重ねたことにより、学際的な中世貨幣学の基礎を固めることができた。その上に立って、政治権力のコミットが極端に希薄という特異な特徴をもつ日本の中世貨幣に対する理解を深めることにより、時代や地域ごとの政治環境に左右されない貨幣一般の特質を究明して社会に還元していくことが今後期待される。

研究成果の概要(英文)：Although the plan had to be repeatedly postponed and changed due to the impact of COVID-19 in the final year of the project, 10 times throughout the entire period were held research meetings and field surveys on ancient documents related to monetary circulation, excavated coins with their excavation sites, and sites that were centers of coinage distribution; the entire research organization shared results, findings, perspectives, and methods with each other. Fifteen papers contributed by almost all of the main members of this study and some of the guest speakers invited to the study groups, organized into four parts ("Establishment and Development of Medieval Coins," "Ming and Japan Concerning Coins," "Money Circulation from the Viewpoint of Excavated Coins," and "From the Middle Ages to the Early Modern Period,"), are published as "Japanese Medieval Coins and East Asia" edited by Keiichi Nakajima.

研究分野：日本中世史

キーワード：中世貨幣 渡来銭 為替 割符 永楽銭 出土銭 東アジア

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本中世貨幣史の研究は、出土銭研究の発展に刺激されて 1990 年代から急速に発展を遂げてきたが、21 世紀に入ってから日本史学(文献史学)の研究者の層も厚くなってきた。研究代表者がかつて描いた全体像に対して、様々な角度から異論も提出されており、関係史料を全面的に再検討して中世貨幣史をゼロから組み立て直すべき時機が到来している。考古学・東洋史学・経済史学などでも関連する刺激的な成果が相次いでおり、中世貨幣史の再構築にあたってはこれら隣接諸分野との連携を深めることが不可欠と言える。渡来銭を用いる中世日本についての新たな研究視角を模索するうえで、同時代の西欧・中欧の領邦国家で外国貨幣が流通する状況との比較研究にも可能性が認められる。

2. 研究の目的

主として日本史学(文献史学)の方法に基づき、経済史学の助言も参考にしつつ、中世貨幣の成立過程・流通実態・解体過程ならびに近世貨幣成立過程に関する過去の研究成果に徹底的な再検討を加えるとともに、考古学と協力して収集・分析した国内の出土銭貨データと突き合わせて、中世の銭貨流通の実態を復元する。また、対外関係史・東洋史学・東アジア考古学との協力によって、貨幣流通に関して東アジア各地と日本とがどのような影響を及ぼし合っていたかを具体的に跡付け、西洋史学・ヨーロッパ考古学とともに、日欧の中世貨幣の比較研究を行う。これらの実践を通じて、学際的な中世貨幣学の基盤と方法を確立するとともに、中世日本の経済・社会に対する一段と深い理解に資することを目指す。

3. 研究の方法

中世貨幣史そのものの再構築に取り組む a-1(中世貨幣の成立過程の再検討)・a-2(中世貨幣の解体と近世貨幣の成立過程の再検討)・a-3(中世貨幣の流通実態の再検討)・a-4(割符・為替の再検討)の 4 班のプロジェクトを並行させながら進め、隣接分野の視点に基づいて中世貨幣史を見直す b-1(出土銭情報の収集・集成と分析)・b-2(貨幣流通に関する東アジアと日本との相互影響関係の分析)・b-3(ヨーロッパ中世貨幣研究の整理)・b-4(出土貨幣の日欧比較)の 4 つの支援班がこれをサポートする体制を取る。なお、2017 年度は a-1・a-4 の両班の活動を中心に据えて「中世貨幣の成立過程」「割符の流通」をテーマとする研究会合で議論を深め、続く 2018 年度は a-2 班の「中世貨幣の解体と近世貨幣の成立過程」、2019 年度は b-2 班の「貨幣流通に関する東アジアと日本との相互影響関係の分析」、2020 年度は a-3 班の「中世貨幣の流通実態の再検討」と、年度ごとに重点課題を設定しながら共同研究を進展させる。

4. 研究成果

本共同研究で実施した研究会合と研究報告は以下のとおりである。それぞれの会合に伴う現地調査についても付記しておく。

- ・第 1 回(2017 年 5 月、東京・慶應義塾大学)
「日本中世貨幣史の再構築 学際的な中世貨幣学の確立に向けて」科研基盤研究(B)計画概要
(中島圭一)
割符のしくみ 原初的替銭の特質の克服 (井上正夫)
- ・第 2 回(2017 年 12 月、滋賀・草津市立まちづくりセンター)
返抄・下文・割符(佐藤泰弘=ゲストスピーカー・甲南大学)
中世前期渡来銭受容研究の現状と課題(伊藤啓介)
北宋中国の貿易体制と日本(山崎覚士=ゲストスピーカー・佛教大学)
現地調査先:滋賀県文化財保護協会、塩津港遺跡、菅浦中世村落跡など
- ・第 3 回(2018 年 2 月、福岡・福岡市埋蔵文化財センター)
北部九州における中世都市の様相 博多遺跡群と箱崎遺跡群の出土銭貨からの考察
(櫻木晋一)
大銭の諸問題(三宅俊彦)
渡来銭流通の開始と確立をめぐって(中島圭一)
現地調査先:福岡市埋蔵文化財センター、博多遺跡群、大宰府中世都市跡など
- ・第 4 回(2018 年 6 月、大阪・関西大学)=貨幣史研究会主催
高木久史『近世の開幕と貨幣統合 三貨制度への道程』ならびに川戸貴史『中近世日本の貨幣流通秩序』の合評
現地調査先:堺市立埋蔵文化財センター(堺市文化財調査事務所) 堺環濠都市遺跡
- ・第 5 回(2018 年 10 月、島根・石見銀山世界遺産センター)=他 2 科研と共催
南シナ海沈船発見の前近代貨幣と関連問題
(李慶新=ゲストスピーカー・広東省社会科学院歴史研究所)
サルファーからシルバーへの転換(鹿毛敏夫=ゲストスピーカー・名古屋学院大学)
16 世紀銀の流通と社会浸透(本多博之)

- 現地調査先：益田市教育委員会・石見銀山遺跡など
- ・第6回（2019年3月、三重）は研究会合なし
現地調査先：神宮文庫、伊勢神宮周辺中世都市跡（山田・宇治・河崎など）
 - ・第7回（2019年7月、鹿児島・加治木福祉センター）
15～16世紀の撰銭令と明の揀銭禁令
（呉良晨＝ゲストスピーカー・慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了）
中世後期日本と東アジアの貨幣流通（大田由紀夫）
コメント（中島楽章）
現地調査先：加治木郷土館、加治木鑄銭所跡、喜界島埋蔵文化財センター、手久津久遺跡群
 - ・第8回（2020年1月、沖縄・沖縄県立図書館）
琉球列島の出土銭貨～グスク時代・古琉球期を中心に～（宮城弘樹）
ウィリアム・アダムズ「琉球諸島航海日誌」における琉球の貨幣の状況について
（上里隆史＝ゲストスピーカー・浦添市立図書館）
東ユーラシアにおけるベトナムおよび沖縄の出土銭貨の位置づけ（三宅俊彦）
コメント（高良倉吉＝ゲストスピーカー・琉球大学）
現地調査先：那覇市文化財課資料整理室、沖縄県立埋蔵文化財センター、首里城跡、渡地村跡、沖縄県立図書館、今帰仁村歴史文化センター、今帰仁城跡など
 - ・第9回（2020年10月、北海道・札幌北24条会館）
中近世移行期日本における貨幣流通の実態をめぐって：北海道からの視点を含む（高木久史）
織田信長の撰銭令をめぐって（平井上総＝ゲストスピーカー・藤女子大学）
16～17世紀における伊勢神宮周辺地域をめぐる貨幣・信用・金融
冊子史料の分析を中心に（千枝大志）
16世紀後半関東における銭貨関連史料の悉皆集成にむけて（川戸貴史）
現地調査先：厚真町軽舞遺跡調査事務所、余市水産博物館、大川遺跡など
 - ・第10回（2021年2月、オンライン）
16～17世紀における伊勢神宮地域をめぐる信用と金融の地域性（千枝大志）
個別発見貨(single-finds)にみる銭貨流通の地域差（石神裕之）
永楽通寶の日本流入に関する予察（古澤義久＝ゲストスピーカー・福岡大学）
中世博多の港湾関連遺構（大庭康時＝ゲストスピーカー・福岡市役所）
現地調査は中止（岐阜県・愛知県を予定）

以上のような研究報告と討論を通じて相互に成果や視点を提供し合うとともに、貨幣流通関係の古文書、出土銭の実物と出土地点、あるいは銭貨流通の拠点遺跡などの現地調査を重点的に実施した。なお、これらのほかにb-4（出土貨幣の国際比較）班が2019年度に日欧比較考古学ワークショップ「中世の港と物流」を開催している。

最終年度はコロナ禍で大幅な計画変更を強いられ、特に海外の研究協力者を招いて共同調査・意見交換を行う予定が最終的に2022年度までずれ込んでしまったが、その間に共同研究の成果をまとめた中島圭一編『日本の中世貨幣と東アジア』（勉誠出版）を上梓することができたので、以下にその内容のあらましを掲げる。

本書は四部構成で、第一部「中世貨幣の成立と展開」には、渡来銭と割符（定額の手形として流通した中世の為替証券）の流通を成り立たせた基盤を考察する論考4本を収めた。中島圭一「渡来銭流通の開始と確立をめぐって」は、宋銭の流入開始から国内通貨としての地位確立に至る過程を再検討する。伊藤啓介「中世手形の信用とその決済システムについて」と井上正夫「割符のしくみの応用技術」の両論文は、いずれも為替・割符の流通を成り立たせた社会的基盤を考える。前者は研究史を丁寧に整理したうえで、割符が最終的に持ち込まれる先の支払人がなぜ現銭との交換に応ずるのか、支払人に対する強制力の問題を、後者はその支払人を含めた各関係者が手形事故を避けるためにどのような方策を講じたのかをそれぞれ論ずる。決済の「技術」に注目する点で井上論文とも共通する高木久史「中世日本に銭は足りていたか」は、供給と流通量の不足という視角から中世貨幣をめぐる問題を概観する。

続いて第二部「貨幣をめぐる明と日本」では、室町・戦国期における明から日本への銭貨流入に関わる国内外の動向をめぐって、4人の論者が議論を戦わせる。古澤義久「永楽通寶日本流入経路の検討 東南アジア経路説の提唱」と川戸貴史「永楽銭の流通」の2本の論文は、いずれも永楽通寶をめぐる問題を論ずる。前者は出土資料を軸に、日本への流入時期と経路を再検討した新説を提示し、後者は、文献史料を軸として出土資料も援用しながら、16～17世紀の史料に見える「永楽銭」の実体まで含めて、その全体像を描く。続いて、中国や海域アジアの視座から15～16世紀の日本における貨幣流通に論及するのが、大田由紀夫「中世後期日本の貨幣流通と東アジア」と中島楽章「撰銭と東アジア銭貨流通」である。前者は明・朝鮮・日本の共時的な経済成長の背景として東南アジアを含めた国際交易の隆盛を重視し、相互の経済的影響関係、特に明から日本への銭貨の流入量の増減に基づいて撰銭状況などの通貨変動を説明する。後者は、明の方が日本より銅銭の価値が高い傾向を指摘して、当該期における日本への銭貨流入量の過大視を戒めて、前者の議論を批判する。

さらに第三部「出土銭からみた貨幣流通」には、出土銭のデータに立脚した議論の可能性を追

求した論考 4 本を収めている。石神裕之「個別出土銭からみた銭貨流通の地域差 東国を中心に」と櫻木晋一「出土銭貨研究の諸相 近年の動向から」の両論文は、国内の出土銭をめぐる問題を論ずる。前者は個別出土銭の集計に基づいて、鎌倉時代から戦国時代にかけての東国を中心とする銭貨流通の動向を通観し、後者は日本の出土銭貨研究における近年の動向を紹介しつつ、九州を中心とする流通実態の一端を浮かび上がらせる。これと対比する外部の視点を提供するのが宮城弘樹「琉球列島の出土銭貨」と三宅俊彦「東アジアの銭貨流通モデル」で、前者は日本の中世と並行する古琉球における流通の推移を出土銭貨から描き、後者は国・地域ごとの出土銭の特徴から、東アジア全体にわたる銭貨流通のモデルを提起する。

最後の第四部「中世から近世へ」には、中近世移行期の貨幣と信用に関する論考 3 本を収録する。本多博之「南京銭と鍛(ちゃん)再考」は、毛利氏領国の事例に即して「南京」「鍛」「並銭」など通用価値の異なる銭が用いられた階層化の実態と、それに対する公権力の対応を検討し、中世末から近世初頭にかけての銭貨流通を論ずる。平井上総「織田信長の撰銭令をめぐって」は、織田信長による一連の撰銭令の関係史料を丁寧に見直し、立法の経緯を再考する。千枝大志「十六～十七世紀伊勢神宮地域をめぐる信用と金融の実像」は、近世の貨幣流通の一翼を担う私札・藩札の先駆けとなった山田羽書を生んだ伊勢の信用取引の特質に踏み込む。

以上、本書に収録した各論文は、日本史学(文献史学)・考古学・東洋史学・経済史学などを一体化させた研究という面でまだまだ向上の余地はあるものの、相互に視点やデータを共有したことによる新たな中世貨幣学の構築が着実に進んでいることを良く示すものと言える。その上に立って、政治権力のコミットが極端に希薄という特異な特徴をもつ日本の中世貨幣に対する理解を深めることにより、時代や地域ごとの政治環境に左右されない貨幣一般の特質を究明して社会に還元していくことが今後期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤啓介	4. 巻 690
2. 論文標題 13・14世紀の流通構造と商業	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 43-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木久史	4. 巻 988
2. 論文標題 中近世移行期における貨幣流通の実態をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木久史	4. 巻 50
2. 論文標題 Means of Exchange in Small Transactions in 16th Century Japan: lower class bronze coin, silver currency, and credit use	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語国文論集	6. 最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木久史	4. 巻 15
2. 論文標題 Reintegration of Bronze Coins during the Late 16th and the Early 17th Century Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海港都市研究	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川戸貴史	4. 巻 988
2. 論文標題 15～17世紀日本貨幣流通史研究の視点と論点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三宅俊彦	4. 巻 5
2. 論文標題 沖縄の出土銭	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 淑徳大学人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上正夫	4. 巻 970
2. 論文標題 鎌倉時代の原初的替銭 その特質および割符との並存理由について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三宅俊彦	4. 巻 77-2
2. 論文標題 10-15世紀東ユーラシアにおける銭貨流通	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本多博之	4. 巻 186
2. 論文標題 中近世移行期の貨幣流通と石高制	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州史学	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻木晋一	4. 巻 74-4
2. 論文標題 貨幣考古学と経済史研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教経済学研究	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 本多博之
2. 発表標題 中近世移行期の貨幣流通と石高制
3. 学会等名 九州史学研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 中近世移行期日本における貨幣流通の実態をめぐって：北海道からの視点を含む
3. 学会等名 北大史学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川戸貴史
2. 発表標題 東アジア海域と中世日本の貨幣
3. 学会等名 復旦大学歴史学系研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千枝大志
2. 発表標題 山田羽書の実像についての一考察～前期山田羽書を中心に～
3. 学会等名 貨幣史研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千枝大志
2. 発表標題 冊子史料からみた16-17世紀における伊勢神宮地域の貨幣・信用・金融 - 『外宮子良館日記』の分析を中心に
3. 学会等名 北大史学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takagi Hisashi
2. 発表標題 Reintegration of bronze coins during the late 16th and the early 17th century Japan
3. 学会等名 18th World Economic History Congress（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 16世紀日本における貨幣の発行と流通
3. 学会等名 日本金融学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takagi Hisashi
2. 発表標題 Reintegration of bronze coins during the late 16th and the early 17th century Japan: especially focused on the transactions between Japan and China
3. 学会等名 The 9th World Committee of Maritime Culture Institutes International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miyake Toshihiko
2. 発表標題 Circulation of Chinese coins in East Asia
3. 学会等名 4th Asian Association of World Historians Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川戸貴史
2. 発表標題 Currencies in the Medieval and the Early Modern Japan
3. 学会等名 The 15th International Conference of European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 高木久史	4. 発行年 2018年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 224
3. 書名 撰銭とビター文の戦国史	

1. 著者名 川戸 貴史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 288
3. 書名 戦国大名の経済学	

1. 著者名 大田 由紀夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 280
3. 書名 銭躍る東シナ海 貨幣と贅沢の一五～一六世紀	

1. 著者名 中島圭一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 日本の中世貨幣と東アジア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	本多 博之 (HONDA Hiroyuki) (30268669)	広島大学・人間社会科学研究科(文)・教授 (15401)	
研究分担者	伊藤 啓介 (ITO Keisuke) (10733933)	総合地球環境学研究所・研究部・外来研究員 (64303)	
研究分担者	高木 久史 (TAKAGI Hisashi) (50510252)	大阪経済大学・経済学部・教授 (34404)	
研究分担者	川戸 貴史 (KAWATO Takashi) (20456289)	千葉経済大学・経済学部・准教授 (32512)	
研究分担者	千枝 大志 (CHIEDA Taishi) (00609969)	同朋大学・仏教文化研究所・非常勤職員 (33911)	2017～2018年度は研究協力者
研究分担者	石神 裕之 (ISHIGAMI Hiroyuki) (10458929)	京都芸術大学・芸術学部・准教授 (34319)	
研究分担者	橋本 雄 (HASHIMOTO Yu) (50416559)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	中島 楽章 (NAKAJIMA Gakusho) (10332850)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三宅 俊彦 (MIYAKE Toshihiko) (90424324)	淑徳大学・人文学部・教授 (32501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大田 由紀夫 (Ota Yukio)	鹿児島大学・法文学部・教授	2019年度～
研究協力者	宮城 弘樹 (MIYAGI Hiroki)	沖縄国際大学・総合文化学部・准教授	2019年度～
研究協力者	小野 正敏 (ONO Masatoshi)	国立歴史民俗博物館・名誉教授	
研究協力者	ブルジョワ リュック (BOURGEOIS Luc)	カン大学・古代中世考古歴史研究センター・教授	
連携研究者	櫻木 晋一 (SAKURAKI Shin'ichi) (00259681)	下関市立大学・経済学部・教授 (25501)	
連携研究者	井上 正夫 (INOUE Masao) (10633274)	松山大学・経済学部・准教授 (36301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日欧比較考古学ワークショップ「中世の港と物流」	開催年 2019年～2019年
-----------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------